

# 受託研究 多分野で展開

「研究開発における『シエルパ』を自指したい」。エベレストにはその土地に精通し、荷物を運び、うまくコミュニケーションを取りながら登山者を陰で支援するシエルパと呼ばれる案内人がいる。受託研究開発を手がけるKRI（京都市下京区）の川崎真一社長は、自社のあり方をその姿に重ねる。材料、蓄電池、水素・燃料電池、環境・バイオなど幅広い分野で展開してきた同社の取り組みを追う。

## 米研究機関がモデル

KRIは大阪ガス子会社ではあるが、同社増員したりできるわけでもない。投資意思決しない。全く新しいこと程度しかなく、顧客の定の判断材料がどうしをやらなければ。その大半は一般企業。受託でも必要だ。KRIはうした危機感が強くあ研究は秘密保持契約をそこにビジネスチャンとした。大ガスの藤原正結ぶので、当然だが顧客の情報を大ガスに流すこともない。特定メ技術研究所として創深く関わったという。1987年、関西新究員として立ち上げに。大ガスは当時、米ITバブル崩壊後のガス事業者の子会社とスタンフォード大学発事業体制見直しの一環という、比較的中立的な研究機関であるスタとして、2003年にポジションであるたンフォード研究所（S KRIへ社名変更。顧客企業も依頼を出R I、現SRIインタ客企業も経営が厳しくしやすという側面が「ナショナル」に、技なり、強みであった中術研究を委託してい長期的な研究開発の依

企業は新規事業に乗り出す際、いきなり大規模な研究所を自前で

## 研究開発の道案内 KRIの挑戦

KRIの組織体制	
<b>京都地区</b>	<b>大阪地区</b>
材料 スマートマテリアル研究センター	水素・燃料電池 新エネルギーデバイス開発部 電気化学デバイス研究部
蓄電池 エネルギー変換研究部 次世代電池研究部	環境・バイオ 環境化学プロセス研究部 センシングバイオ研究部
技術調査 先端技術調査部	分析・計測・解析 解析研究センター

## 困りごと集めて成長継続

頼が少なくなったが、「直近の研究は自社でやるので、その少し先の研究をお願いしたい」と、企業ニーズが転換する。KRIもそれに対応して、成長を続けてきた。受託案件の約半分を占めるのが蓄電池分野であり、業界では広く知られる。エネルギー変換研究部担当の木下肇常務執行役員は「最先端の開発は、顧客の困りごとの中にあり。困りごとを集めることで、国でも描けないロードマップを描ける」と自信を見せる。

リチウムイオン電池（LIB）の開発者として19年にノーベル化学賞を受賞した吉野彰旭化成名誉フェローは、KRIの特別顧問の一人だ。電池関連の研究者にとって、KRIの存在感の大きさを示しているといえる。